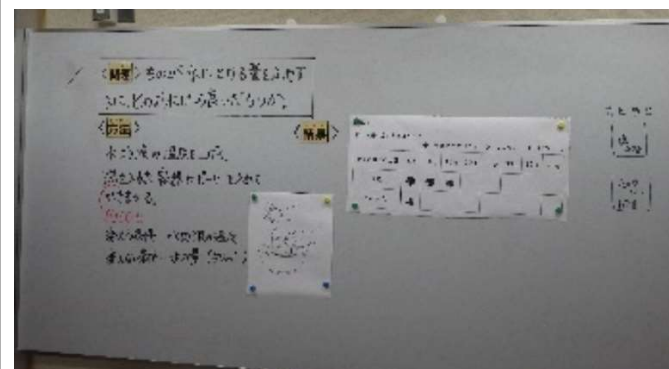


# 令和6年11月6日（水）校内研究授業と協議

## 5年生 理科（6年担任）

## 6年生 体育（5年担任）



### 【授業の様子】

5年1組の理科では、食塩・ミョウバンを使って、ものの溶け方の規則性を調べました。事前の実験では、ものが水に溶ける量には限りがあること、ものによって溶かすことができる量は違うことを確認しています。今回は、「水の温度を上げると、水に溶ける量は変わるのか」という視点で実験を行いました。友達と役割分担をして、協力し合って実験を進め、「これはどう？溶けてる？」とみんなに関心をもってビーカーを覗き込む姿が見られました。



### 【授業の様子】

6年1組の体育では、陸上運動の高跳びを行いました。各自がめあてを意識するとともに、自らの課題を設定して運動に望みました。補助運動では、低いハードルと高いハードルを跳び、はさみ跳びの基本的な足の動きを練習しました。主運動では、手本となる動画を参考にしたり、自分の跳び方を時間差で流れる映像で確かめたり、友達同士でアドバイスし合ったりしました。学習の振り返りでは、帽子の色の変化の様子から、多くの児童がめあてを達成したことを全体で確認することができました。



## 【協議会の様子】

今年度より低・中・高学年（若草学級の担任含む）に分かれて学団を作り、それぞれの学団に適した研究授業や協議会の方式を提案するようにしました。当日は、区内における公開校内研究会の設定となっていたため、近隣校の先生方を始め、川崎市の職員の方など多くの参観者が来校し、授業内容や教科担任制について協議を行うことができました。高学団からは、以下の提案がありました。

### 学団提案・・・教科の特性を生かした年間計画

#### （１）理科における指導の統一性

理科の学習で重要なことは、児童が主体的に問題解決の活動を行い、実感を伴った理解ができるようにすることです。主体的な問題解決の活動とは、児童自らが自然の事物・現象に興味・関心をもち、問題を見だし、問題解決の一連の過程を経験することです。そのため、高学年ではこの問題解決型の指導を共通して意識的に行うことが重要です。単学級の教科担任制において指導上のメリットとしては、2 学年で共通する能力の育成にも重点を置いて指導することができることです。第5 学年では観察・実験などを計画的に行っていく条件制御の能力を育成することに重点が置かれており、第6 学年では条件制御の能力に加えて、自然の事物・現象の変化や働きについてその要因や規則性、関係を推論する能力を育成することに重点が置かれています。

#### （２）体育科における指導の統一性

体育科の学習で重要なことは、「楽しさや喜び」という運動がもっている特性や魅力に応じて運動の基本的な技能を身に付けること、集団の中での役割を自覚して学習を進めること、深く考え行動することです。高学年では、学習課題の達成に向かって自己の最善を尽くして運動する態度を育てることが重要です。そのため、特定の方法を反復、継続的に当てはめるだけでなく、自己の課題に向け、その解決方法の仕方を工夫できるようにしたいと考えました。また体育科は、指導内容を2 学年ごとのまとまりの中で7つの領域で、それぞれの系統性をふまえて体系化されています。各運動領域で示された内容は、2 学年のまとまりの中で、いずれかの学年で取り上げ指導することもできます。（「体づくり運動」を除く）

そこで、2 学年が指導計画を同じ時期に、同じ領域を学習することで、指導の効率化を図ることができると考えました。指導内容では、発達段階を意識して、この頃の児童に適した学習指導のあり方を考えて2 学年を指導することで、それぞれの状態に合わせた指導をすると共に、見通しをもって手立てをとることができました。児童が自ら運動の課題をとらえ、その課題の解決を目指す活動が工夫して行うことができるように、教師はその準備をしました。その際に、同じ領域の運動なので、身に付けさせたい基本的な技能は共通であり、課題となることも予想しやすくなります。また、学習用具の準備でも効率化が図れます。同じ時期に同じ道具を使うことで、準備がしやすくなるメリットもあります。

以上のように、学年は違っても、2 学年の系統性に目を向けることで、指導の効果的なあり方と指導の効率化を図ることができます。単学級では、同じ指導内容で授業を行うことはできませんが、この系統性を意識した指導をすることで、授業改善の視点を見い出すことができることを提案しました。